

白山ふるさと文学賞

第九回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

何気ない一言で

鶴来高校三年

竹田 たけだ

穂夏 ほのか

「誹謗中傷」

SNSが発達している現代だからこそ目に入ることが増えたこの言葉。言論の自由は何を言ってもいいととらえている人が多いのではないかと私は思う。

SNSには匿名でコメントができるという便利なシステムがあるが、このシステムは時に人を変えてしまう。「匿名という盾を手にした人間は凶暴だ」この言葉を耳にした時、私は改めてSNSは使い方を間違えると凶器へと化してしまうんだということを思い知らされた。実際に面と向かって行う家族や友達とのコミュニケーションとは違って、相手の姿が見えないSNSでは、人を傷つける言葉を平気で書き込むことも、誰かを精神的に追い詰めることも簡単にできてしまう。そして一番怖いのが、自分の発信した言葉が誰かを傷つけ、苦しめているということを自覚している人が少ないということだ。確かに、相手が苦しんでいる表情が見えないために、私のせいではないと思ってしまうのかもしれないが、画面の向こうには、自分が発信する言葉の先には、必ず自分と同じ人間がいるということを心に留めて、何かを発信する前にそれは本当に発信してもいいものなのかを考えてほしい。コロナ禍にある現在も、この「発信する前に考え、見直す」という行動がとて大切になってくる。

ある日、コロナの元感染者で実名を公表した方が、完治したにも関わらず「店に来てほしくない」などと周りの人から非難や誹謗中傷をうけ、心にできた傷は数か月たっても癒えないというニュースを目にした。これはSNSではなく、直接的なコミュニケーションでの出来事だが、SNSでもコロナ感染者に対する誹謗中傷があるのは事実である。そしてウイルスによって暗い世の中になりつつある今だからこそ、「そんなことはやめよう」と一声あげることが大事だと思う。

しかし、ネットはこのような改善すべき点がある反面、上手く使いこなせば人を助けられるものにもなる。実際に私はネット、SNSに助けられた経験がある。私は小学校高学年の時にクラスメイトからノートに

悪口を書き込まれたり、避けられたりといういじめをうけた。そして、それまでは楽しかった学校での生活がなくなり教室の中での周りからの視線が怖かったり、近くでヒソヒソ話をされると自分の悪口を言われているような気がして落ち込む日が増え、次第に学校へ行く回数も減っていった。中学生になっても、時々学校を休んでしまうことがあり、私は段々と自己嫌悪になりつつあった。そんな時、私はSNSというものに出会った。そしてSNS上には私と同じような悩みを抱えている人がたくさんいるのだということを知った時、「私だけじゃないんだ」という安心感を得ることができた。また、私がSNS上で弱音を吐いたときに話を聞いて、相談にのってくれるような友達もでき、一度は終わらせてしまおうと思った私の人生を私は今も生き続けています。これは匿名というシステムや、面と向かっては言えないような弱音を吐きやすい環境がSNSにあったからこそできたことだと私は思うし、「SNSは危ない」「SNSは信用できない」などという理由でSNSを使わないようにしている人がいるかもしれないが、SNS上には良い人もいるんだということを知ってほしいと思う。そして私のようにSNSによって救われた人もいることを心の片隅においてほしい。

SNSは、使う人によって善にも悪にもなる。あなたの何気ない一言で救われる人もいれば、あなたの何気ない一言で心に傷がついてしまう人もいて、あなたが発する「何気ない一言」が誰かの人生を大きく変えてしまうくらい、言葉が持つ影響力は大きいということを私は学んだ。だから言葉を凶器にするのではなく、誰かを守るために、救うために使ってほしい。言葉で人を助けるのは難しい、と思わずに、「大丈夫？」や「どうしたの？」と一言かけてあげるだけでも心が楽になることもあるので、たった一言で良い、たった一言優しさのある言葉をかけてあげるだけで救えるものがある。

最近悪いイメージを持たれがちなSNSだが、私はSNSが悩みを持ち、苦しんでいる人のよりどころになってほしいと思う。現在、コロナ

ウイルスによつて様々なイベントや行事がなくなり、楽しみが奪われつつある今だからこそ、世の中が暗いニュースであふれている今だからこそ、SNSを「誹謗中傷」に使うのではなく人間がお互いを支えるような場にするべきであると思うし、面と向かつて行うコミュニケーションではもちろん、SNSでも「優しさ、思いやりの心」をすべての人に向けてほしい。そして、今のこの苦境を乗り越えたい。

